戦後　初めてスタートの青森高弓道部員として　その思い

戦後、学校弓道が全面禁止から、その復活を許されたのが、昭和 26 年 7 月、GHQ を通じ文部省から認可されたのである。　実に６年間という長い期間を経ての再スタートとなった。　しかし、いざ学校弓道ができるようになったとは言っても戦後の壊滅状態からであり、その再開までには幾多の困難が予想されていたのである。

突然　「弓道場の修祓式が行われるので、見学するように！」との校内放送があって、何のことかわからぬまま、見学することにしたのであった。　昭和 28 年 10 月 9 日のことである。　体育館の横にぴったり寄り添うような形で建てられた、独特な佇まいを見せる「弓道場」と言われる建物が、目に留まり、生徒たちの黒山のように立ち並んだ中に、溶け込んだのであった。

「あずち」と言われる的場に、的に見立てて白扇が砂に立てかけられ、特異の衣裳の 3 人の射手が、一人として白扇を射抜けなかった結果を、「へたくそ！」と見ていた記憶が残っている。　後になって聞いたところ、それは白扇の真上「八幡」に外すべきとのこと。

それにしても　凄い弓道場である。後に勉強の結果知ったことだが、古今　弓道場とはこうあるべきといった格式、風格を備えた、素晴らしい建造物であった。

加えて、当日招かれ、式の行射をいただいた著名射手の方々も、全日本弓道連盟会長千葉胤次範士、大射道教阿波研造範士の三高弟といわれる神永範士、安澤範士、吉田範士、そして鈴木伊兵衛範士と、およそ弓道人なら憧れ止まない名射手達である。

見学後、私は直ちに弓道部員となった。

部員の指導もまた、徹底した英才教育がなされ、青森県弓道連盟会長沼田末吉先生のみが、唯一の指導者として来校されることになっていた。　来校される日には、道場入口の部員たちの脱ぐ履物の様子は？…　それを感じた部員たちは、緊張の極みに達していたものである。　結果、競技においては、最初の青森県高校弓道大会は、2 年生の春からの参加となって、５校（弘高、東奥義塾、八高、三戸高そして青高）で争われ、最下位（しかし射形、体配は１番と評価された)。そして 3 年生の大会で優勝している。しかも我が弓道場で。

このように青森高の学校弓道のスタートは、全国的に見てもいち早くの感があり、高校生にとっては立派過ぎる弓道場が与えられ、青森県最高の英才教育がなされ、弓道場修祓式には、全日本弓道連盟会長はじめ日本弓道を代表する名射手が招かれ、一高校レベルでは考えられない様なことが、現実に行われてのスタートであった。

このことは、何を意味するのだろうか？
　棟方志功画伯の作品の中に、「花矢の柵」というのがある。　その作品の意を志功先生は、「これまで日本の文明、文化の美のあり方を表現するのに、南から北に向かっているあり方が、非常に多かった。けれどもこれからは、この矢を青森の方からの命を南の方へ、ぶっつけてやるというようなことに、したいと思ってね」。
　まさにこの意同様、青森県を背負って立つ若者の気迫を、「青森高校の弓道はこれだ！」とのいのちを、全国にぶっつけてやる！　そしてその拠点がここ青高「弓道場」だ！
との意がありありと読み取れるではないか。

　私の手元に一片の小さな木塊がある。「弓道場」が、止むを得ない事情により取り壊わされた時、その棟木の一部が私に届けられたものである。
　この木塊が私に語りかけるのは、「無念」ではない。むしろ「希望」である。
将来、再び建てられるだろう新たな青森高校弓道場の一部となって、溶け込み、こころを引き継いでやる・・・

平成 30 年８月３１日
統合六回生（昭和 30 年度卒業生）　　北川　　鶴雄